東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

伝統楽器を活用した国際交流活動の充実：三線・太鼓などを用いた音楽の指導の工夫

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-05-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 橋本,哲志
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173968

伝統楽器を活用した国際交流活動の充実

―― 三線・太鼓などを用いた音楽の指導の工夫 ――

前ジッダ日本人学校　教諭
神戸大学附属小学校　教諭　橋　本　哲　志

キーワード：国際交流活動、伝統和楽器、三味線（三線）、小規模校

１．はじめに

在外教育施設で日本や現地の伝統楽器を活用することは、我が国の伝統音楽や、現地の伝統音楽への理解を深めるとともに、他国の文化を尊重する態度を養う上で絶好の機会となる。学習指導要領においても、この点は前回の改訂でより重視されており今後も継続されると思われる。

本レポートは、テーマ「伝統楽器を活用した国際交流活動の充実」について、ジッダ日本人学校における事例をもとにまとめた。多くの在外教育施設において、日本の伝統楽器である和太鼓は扱われているようだが、三味線（三線）のような旋律楽器については盛んではないように思われる。本レポートにおいては、伝統和楽器の旋律楽器の三味線（三線）について記述する。

２．研究の内容

(1) 伝統楽器充実のための取得方法について（三線について）

伝統楽器活用のためには、伝統楽器がないと実現しない。取得方法について、本校での事例を紹介する。

【三線の購入：平成25年５月】

〈購入までの流れ〉
「(ⅰ) 学校長への提案」→「(ⅱ) 学校運営委員会への提案・承認」→「(ⅲ) 購入・運搬」
※金額が1000サウジリアル（日本円で約３万円〈2015年４月時点〉）以下の場合は（ⅲ）のみ。

(ⅰ) 学校長への提案

ジッダ日本人学校での高額（1000サウジリアル以上：日本円で約３万円以上〈2015年４月時点〉）の物品の購入は、運営委員会の承認が必要。学校長に伝統和楽器の指導についての目的と方針を提案し、三線の購入について運営委員会で検討してもらえるようにした。また、派遣前から、新派遣教員担当の教員と三線の活用について相談したり、着任式の際に、自前の三線で校歌を演奏したりすることでスムーズに理解を得ることができた。

(ⅱ) 学校運営委員会への提案・承認

学校運営委員会で、購入物品について提案し、承認されれば購入できる。今回、前年度の特別予算の中で「三線」の購入が承認された。当初木製の三線（１棹、約3000円）を提案していたが、人工皮の三線（１棹、約１万円）の三線を５棹購入してよいこととなった。

(ⅲ) 購入・運搬

インターネット販売をしている楽器店にて購入。この楽器店は海外発送も可能であったため、直接ジッダ日本人学校へ郵送してもらった（郵送費は学校負担。「沖縄県学校用品（株）」。国内発送のみの業者もあるが、その場合は日本の家族等に郵送し、そこから海外発送を依頼するという方法になる）。

教材カタログに載っているような三味線の購入も検討したが、正規の値段はかなりの高額となる。本校のような超小規模校では、経費節約の努力が求められる。

(2) 伝統楽器の指導についての実践

伝統楽器の活用のためには、教員がその楽器の演奏方法について指導できる必要がある。ここでは、その指導方法についてまとめた。三線については、音楽の教員免許を有せずとも、ギター等の弦楽器の経験があれば指導・継続できるように、より簡略化した資料の作成も行った。実践の前提として、以下の２つを述べておきたい。

１つ目は、本実践は、簡単な楽曲の演奏を短期間で実現することが目的であったことである。三線の実践については、筆者がより簡略化した資料を作成しているため、本来の三味線の知識や奏法とは異なるものもあることをご理解いただきたい。

２つ目は、本校の特色である。本校の特色として、以下の２つのことが挙げられる。

○10名程度の全校児童生徒 …… H25：12名、H26：８名、H27：14名　※いずれも４月時点
○最大８歳の年齢差がある異年齢集団 …… H25：小１～中２、H26・H27：小１～中２

少人数かつ異年齢集団であることで、「全員で合奏する際に技術の差が大きい」という短所があるが、少人数であることにより「一人ひとりにきめ細やかな指導ができる」ことや、異年齢集団であることで「児童生徒の学び合いが自然に起こりやすい」という長所もある。このような特色も生かして実践を行った。

【三線の演奏について】

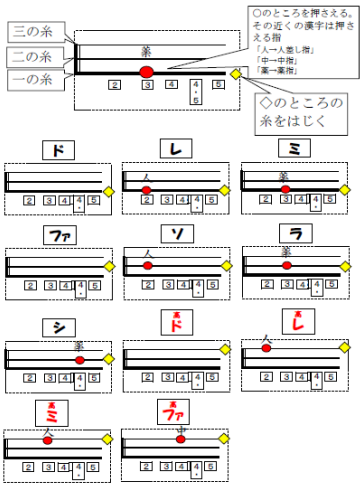
本校では、三線を購入し実践を行った。一般的な三味線（長唄三味線）とは、大きさやバチに違いがあるが、簡単な楽曲の奏法の違いは大きくない。今後は三線と表記するが、基本的にはどの三味線でも同様のことができると考えている。筆者が実践をもとにまとめた「三線の指導のポイント」は以下の５点である。

○より簡単に、はやく三線を弾けることを実感させる！　～三線のタブ譜の作成と直接指導～
○ベタでウケる曲を簡単に演奏できるように！　～簡単な旋律の楽曲（調）の選択～
○一人ひとりのできることを生かして　～個人の技術差に応じた指導・編曲～
○指一本で伴奏・ロックギター風に演奏もできる　～三線版のコードの開発～
○より簡単に、早く三線を弾けることを実感させる！

○より簡単に、はやく三線を弾けることを実感させる　～三線のタブ譜の作成と直接指導～

三線（三味線）の楽譜は漢数字やカタカナなどで表記されるが、初心者には難解である。これらの楽譜や奏法を基礎から学習していくには多くの時間が必要である。しかし、簡単な曲の演奏については、（筆者の主観であるが）三線の演奏は、ギターやバイオリンなどの弦楽器に比べて、簡単に演奏できる。小学３年生から三線を演奏できるように、西洋音階について、簡単な楽曲の演奏に必要な音だけに絞り、数字で押さえる場所を明記するようにした。調弦は本調子で１の糸：ド、２の糸：ファ、３の糸：ドである。また、運指については右のようなタブ譜を作成した。このタブ譜で説明をしながら、実際に運指と弦の弾き方を直接指導することで、特に小学校高学年以上は、早く習得することができた。実績としては、小学３年生以上の児童生徒を対象にし、西洋音階【ド→ド】は30分以内に演奏でき、さくら（文科省唱歌）の旋律演奏は２週間以内（１日15分～20分）で、全員（延べ18名）演奏することができた。音楽が得意な児童生徒の中には、初めて三線を触ってから30分もかからずに、

三味線の「ドレミファソラシド」



さくらを演奏することができる生徒もいた。

○ベタでウケる曲を簡単に演奏できるように！　～簡単な旋律の楽曲の選択～

在外教育施設で演奏する曲としては、専門的な楽曲というよりは、教科書に載っているような日本の伝統的な楽曲や、外国の人の多くが知っている楽曲が適している（ウケる）と考える。

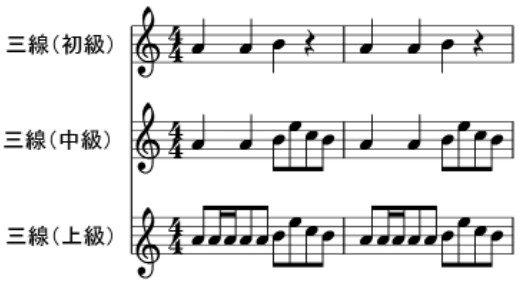
平成25年度から平成27年度までに全員で合奏した曲が以下である。

> 《日本独特の旋律の曲》
> 「さくら（文科省唱歌）」「こきりこ節」「越天楽今様（文科省唱歌）」
> 《世界的に有名な曲》
> 「きらきら星」「ミッキーマウスマーチ」「ラバーズコンチェルト」「オペラ座の怪人（冒頭のみ）」

全員で合奏する曲目として、基本的に先述した西洋音階【ド→ド】の範囲内でおさまる曲を選択した。また、視点として、《日本独特の旋律の曲》と《世界的に有名な曲》で選曲した。数多くある演奏発表の機会に、この視点の両方の曲を入れることで評判が良かった（ウケた）。アンケートも高評価であった。また、基本的に音楽の教科書に載っている曲を選ぶことで、音楽科の学習内容との関連させることもできた。

○一人ひとりのできることを生かして　～個人の技術差に応じた指導・編曲～

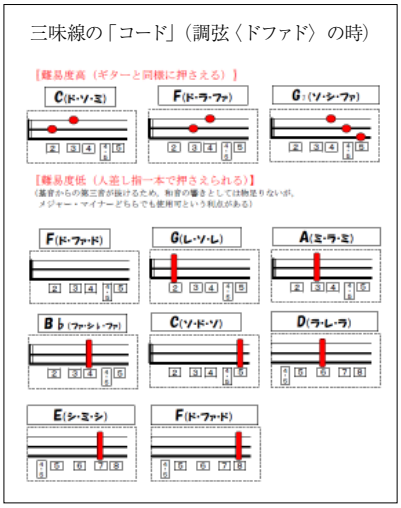
どの楽器でも同じだろうが、演奏技術の習得には、個人差がある。先述したように、本校においては年齢差も大きいため、その個人差に対応できるようにすることが大切である。そこで、同じ曲の中でも「初級」「中級」「上級」を設け、その子の能力に応じて演奏できるようにした。「さくら」の曲の例が右である。



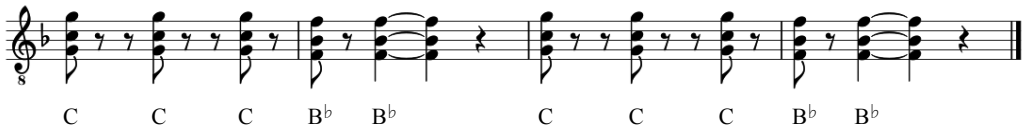
また、個人の演奏で、音楽の能力も高い生徒には、「島唄」「涙そうそう」などの沖縄の楽曲にも取り組ませた。

○指一本で伴奏・ロックギター風に演奏もできる　～三線版のコードの開発～

三線も3つの弦をうまく使えば、簡単に伴奏することが可能である。それをまとめたのが、右である。難易度高は、その和音の基音から第3音が入るため、メジャーマイナーを分けて演奏することができるが、難しい。難易度低は、基音からの第3音が抜けるので、和音の響きとしては物足りないが、人差し指1本で演奏できるため、簡単である。また、弦が3本なので、ギターよりも容易に全ての弦を押さえることができる。



難易度低のコードで、下の楽譜のように演奏すると、ロックギターのようにも演奏できる。本校では、和太鼓演奏のリズムに合わせて、実際に演奏を行った。他国校の音楽教員からセッションの申し出があったり、保護者のアンケートで好印象の意見が出たりするなど、好評であった。



(3) 伝統楽器を用いた交流、発表の場の設定・開拓

他校との交流の場や、演奏の発表の場を多く設けることは、「国際交流活動の充実」を実現する上で、必要不可欠である。本校は筆者が勤務する以前から、様々な場面で和太鼓の演奏を発表してきた歴史があった。それまでの交流はより充実したものを目指して実践し、新たな交流や発表の場を開拓してきた。以下にその様子を紹介する。

【他校との交流】

①トルコ校 「インターナショナルスクールフェスティバル」

例年 4 月下旬にジッダにあるインター校（約 10 か国）が集まって、それぞれの学校の発表を行う。和太鼓・三線の演奏を行ってきた。

②コリアン校交流会

ジッダのコリアン校との交流。人数が同規模ということもあって、交流を続けてきた。平成 25 年度は双方の伝統楽器を用いた発表を行った。平成 26 年度からは事情により実施できない状況である。

トルコ校交流会での発表の様子

③現地校 AGS との交流

現地校 AGS（Advanced Generations Schools）との交流（男子校）。カナダ人教員の担当するクラスが日本についての学習をしており、交流が実現した。交流プログラムの中で、「和太鼓、三線体験コーナー」を設け、本校中学部生徒が担当した。

④リヤド日本人学校との交流

平成 25 年度より、サウジアラビア国のリヤド日本人学校と、WEB 交流会を実施してきた。内容は様々だが、その中の 1 つとして、伝統楽器の発表交流も行った。また、平成 27 年 10 月、リヤド校のジッダ校訪問の際に、実際に本校の演奏を発表した。

AGS との交流で三線を教える生徒

【行事での発表】

上記の交流の他にも、以下の日本人会行事や学校行事等で成果を発表する場を多く設けてきた。

①日本人祭り　②日本人会カラオケ大会　③学習発表会　④その他（終業式・学習参観日など）

３．成果と課題（テーマに関する三線の部分のみ）

○受け持った全員が「さくら」を短期間で演奏できた（3 年生以上：延べ 18 人）。

○国際交流の媒介として、三線のような旋律楽器を活用することの有効性の再確認ができた。旋律楽器を用いることで演奏の幅が広がり、他国の子どもたちからも特に好評であった。

○様々な行事で発表を続けることにより、新たな発表・交流の場へとつながる可能性が見出せた。発表後にそれらの発表についてや、今後の交流についての提案があるなど、次につながることが多かった。

○個と個の交流を仕組むことでとより深い交流ができる。団体と団体では、どうしても交流の質が深まらない。AGS との交流のときのように個と個が交流できるように仕組むことでより深い交流を生んでいくことができると考える。

４．最後に

本実践を通して、小学校の音楽科学習指導要領の「表現」の領域の中で、和楽器の演奏についても明確に扱うようにすれば、「国際社会に生きる日本人としての自覚」をより強く育むことに繋げられると感じている。特に本校のような小規模の在外教育施設においては、三線などの旋律楽器も積極的に取り入れることで、様々な交流会や発表会での演奏の幅が広がる。また、現地のインター校にはない、日本人学校独自の特色ある取り組みとして、在留邦人へ強くアピールすることができる。今後も機会があれば、より多くの子どもたちが、伝統楽器の演奏を通して、我が国の文化に愛着をもち、他国の文化を尊重できる資質能力の育成を支援していきたい。